

第五場面 八組のまとめ

「僕」は、紙切れを取りのけたという誘惑に負けて、それを見ると、この宝を手に入れたという逆らいがたい欲望が生まれて、初めて盗みを犯してしまった。町を右手に隠して「僕」は階段を下りた。その時、下の方から誰か「僕」の方に向かってるのが聞こえた。不安に襲われて、すぐポケットに入れた。上がってきた女中と、びくびくしながらすれ違って、気づくと、羽はばらばらになり、「僕」の心も痛んでしまった。

西本友紀

「僕」はちようを見てから、このちようを自分のものにしたという欲望に負け、初めて物を盗んでしまった。盗んだその時は、とてもうれいという気持ちがいっぱいだった。しかし、足音がすると、自分が何をしたのか、改めて知り、エーミールの部屋に戻り、ちようを見ると、しっかり見なくても分かるぐらいにぐちゃぐちゃになってしまった。後から、こんなことをしてしまった後悔ができた。

渡邊桃香

「僕」は、クジャクヤママユの魅力に負け、紙切れを取った。そこには有名な斑点があり、そのちよう欲しさに盗みを犯した。エーミールの部屋を出ると、足音がしたため、満足感から罪悪感へと変わり、ちようをポケットに突っこんだ。「僕」は、このままじゃダメだと思い、またエーミールの部屋に戻り、ちようを取りだした。するとちようは、つぶれており、「僕」は仲村渠で、自分の罪を取り消すためなら、どんな物でも、どんなことでもするという気持ちがあった。

山下桃加

「僕」は、やっと見ることができたクジャクヤママユを手に入れたという欲望で、盗みを犯してしまった。その時、良心は欲望に負け、ためらうこともなく、満足感でいっぱいだった。しかし、女中が上がってきたとき、良心は目覚め、満足感から罪悪感へと変わっていき、落ち着きを失っていた。そして、それを返して、なかったことにしたいと思った。しかし、大切なちようをつぶしてしまったことで、どんなにひどいことをしたか分かり、罪悪感がより強くなって、悔やんだ。

村瀬紗弥

「僕」は、ちようを見て興奮をして、欲望に負け盗んでしまった。しかし、すぐに罪悪感が感じられ、目が覚めた。自分のために急いで引き返したが、もう遅かった。ちようがつぶれてしまい、泣くしかなかった。「僕」は、つぶれてしまったではなく、つぶれてしまったことに気づき、盗みをしたことよりも心を苦しめた。

横山あさ美

「僕」は、ちようの斑点を見たらちようがほしいという欲望に負けてしまい、初めて盗みをしてしまった。その時は満足感のほか、何も感じていなかった。しかし、下の方から足音が聞こえ、良心が目覚めた。自分はしてはいけないことをしたと。そして、何事もなかったようにするために、エーミールの部屋に戻った。そして、ポケットからちようを取りだした。しかし、ちようはばらばらになっていった。まだ直せるという期待感があったので、ちぎれた羽を取りだした。しかし、羽はばらばらになっていった。「僕」は、どんな持ち物でも楽しみでも投げだそうとするくらいの後悔をした。

堀 鮎美

「僕」はちようを見てから、どうしても手に入れたい、という逆らいたくない欲望を感じ、気づくと、クジャクヤママユを手を隠し、階段を下りているところだった。その時、「僕」は、このちようを持ってはいけないと思い、急いで引き返した。部屋でちようを見てみると、ちようはつぶれ、もう見たくないほどだったが、「僕」はまだ直せるかもという希望を持ち、残った羽を取り出そうとしたが、ばらばらになり、「僕」は自分がちようを盗み、自分の手でつぶしたことを悔やみ、自分の物なら何でも投げ出し、いい気持ちになった。

足立彩音

「僕」は、欲望のままエーミールの部屋からクジャクヤママユを盗み出した。その時はほしかったちようを手に入れたという満足感しかなかったが、良心が目覚め、僕はなんて大それたことをしたんだという思いがわき上がった。入り口の前で「僕」は立ち止まり、自分のためにちようを返そうと、エーミールの部屋に戻った。ちようを出すと、つぶれていた。盗んだことより、ちようをつぶしてしまったことを、「僕」は悔やんでも悔やみきれなかった。

国枝まり

「僕」は、有名な斑点を見たいという誘惑に負け、留め針を抜いた。そのあまりにも美しい斑点の着いたクジャクヤママユを見た「僕」は、逆らいがたい欲望を感じて、生まれて初めて盗みを犯した。その時はとても満足感を感じていたが、その後、自分は盗みを犯して下劣だと感じていた。ポケットに入れたクジャクヤママユはつぶれてしまっていた。盗みを犯した気持ちより、自分がつぶれてしまったという気持ちが強く、とても悔やんだ。

地崎滉平